

傾城戀飛脚

八

新口村段

〔解題〕 安永二年十二月廿三日から曾根崎新地の豊竹此吉座初演。作者は菅專助・若竹笛舁。本曲の系統及びその梗概については、近松名作集下巻の「冥途の飛脚」の解題御参照を乞ふ。

こゝに収めた新口村は本曲の下巻であつて、近松の原作とほぼ同じ筋立により、文に多少の改修が施されて居るに過ぎない。梅川忠兵衛の戯曲中最も知られてゐる一段である。筋をいへば、原本ではこのあとで、梅川と忠兵衛とは尋常に名のつて出て細にかゝり、こゝへ尋ねて來た梅川の兄の忠兵衛は、雪中で大立廻りの擧句、龜屋妙閑の判を盗んで金子をかたつた丹波屋八右衛門と龜屋利平とを捕へて代官に引渡すといふので終つて居る。

調節季候だい。だい。は節季候。つこどに言はれ。調コリヤひどい。いおうへの塵。地掃出す表へ。調てい古
お目出たいは節季候。通らしやれ。かさま貰ふ節季候より。内の様子はせ手買紙屑。お内儀様。紙屑はないかな。
親方衆と違つてこちとは水吞百姓。く候と。地逝ぬれば女房は糸ぐるま。オ、いやな人ぢやわいの。京や大阪と
こなた衆にやる米はないわいのと。地正月までは休みまそと納戸へ。取込み違つて在所に紙屑はない物ぢや。勝手

知らぬ人ぢやさうな。町方へ出て買は 忠兵衛が。勢はる身さへ雪風に。凍え
つしやれ。阿呆な人と笑はれて。つる手先懐に。暖められつ暖めつ。石原
ぶやきながら見廻し。フシ歸る程な 道を足びきの。大和はこゝぞ故郷の。
く同行二人。願歌補陀落や岸打つ波は フシ新口村に着きけるが。詞コレ。爰
三熊野の那智の。ナホス堀お山の詮議と はわしが生れ在所。四五丁行けば實の
は。人目にそれと白木綿。笈摺。フシか 親。孫右衛門殿の所なれど。不通とい
けた順禮姿。詞お鳴様火を一つ借さつ ひ繼母なり。殊に今の身の上を。お日
しやりませ。爰は何といふ所かな。爰 にかけるは大きな不孝。この染井は忠
は大和の新口村。煙草の火は出しませ 三郎というて。親達の家來も同然。堀
ぬ。手の内も法度でござんす。ア、慥 フシマア。こゝへと門の口。詞忠三
食な在所だなど。堀家内をきよろ。殿内にか。ア、久しう逢ひませぬと。
ねめ廻し次の。フシ村へと出でて行く。堀つつと這入れば女房は。詞アノこち
詞ほんに今日程うさんらしい者のたんのは今庄屋殿へ。どつからござんして
と来る日はない。納戸へ這入りもなる 何の用。わしや藪原の治郎兵衛後家の
まい。ドリヤタ飯の拵へと堀道の前に 仲人。で。近い頃こゝへ來た故。前方の
差しかゝる。フシ落人の。爲かや今は 近附きは知りませぬが。若し大阪の衆
多枯れて。薄尾花はなけれども。世を ぢやないか。こちの親方孫右衛門様の
忍ぶ身の跡や先。長堀人目をつゝむ頼 息子殿。大阪へ養子に行て。傾城とや
冠り隠せど色香梅川が。馴れぬ旅路を らいふ物をたんと買うて。人の金を盜
れは易い事。一返り往て來ませう。が

京のお寺が鍾田村の道場へお下り。先と。我が身の上より案じられ。今一度持齋の傳が婆。コリヤ又村一番の茶飲から直ぐに參られたも知れまい。それ京の兩親に。一日逢うて死に度うござみちや。ア、ソレそこへ来る置頭巾は。ではよつ程わしが戻りも遅い。コレ女んす。調オ、道理ぢや。わしもそなたの親達に。智ぢやというて逢ひも京の嶋原へ賣り。まよい客に請出され。なはぬやうに。羞しくべて下んせや。したし。恩のある養子親。妙閑様や許金持の奥様になつて。智の蔭で田も五地と禪はづして。フッ出でて行く。地跡婚の。おすはへも不埒の詫び。そなたは門口はたと締め。掛金かけて。フッ出つとりと暫し。詞もなかりしが。調コレの兄忠兵衛殿の。志も無にした斷り。地今一度しみ。逢ひたいと。ステ人郎を請出しても。わしはそなたの親達て居ても大事ないかえ。ア、いや。もたんと恩のある兄様が猶戀しいと。な。アノ親仁は。弦かけの藤治兵衛。男氣な忠三郎。頼んで今夜は此處に泊互に手を取り抱き合ひ。涙の霧はら八十八で一升の飯を残さぬ達者もの。死ねるとも古郷の土。産みの母の。ハア雪が降るさうなと。地フシ奥の間。今年はムン丁度錢百ぢや。其跡に仔細はかど。一所に埋まれそなたにも。地嫁ハア雪が降るさうなと。地フシ奥の間。今年はムン丁度錢百ぢや。其跡に仔細姑と引合せ。未來の對面さしたいと。地は。西受けの。反古障子を細目。開け。錢で母ぢや人を立て殺した。思へばスエカ、リおろ。涙梅川も。それは嬉見や野風の昌道。後しぶきの吹雪に。親の敵。ア、コレもうよいわいな。しうござんせう。さりながら。わしは。傾けて急ぐ。阿彌陀傘。道場參り今腹立て。何の役に立たぬ事。オ、父様。母様は。京の六條珠數屋町。定ぞ。續きける。調アレ。ありや皆ア、アレ。あそこへ見えるが親父めてこの間詮議にあうて居さんせう。在所の知つた衆。先なは樋の口の水右様。此世の別れお暇乞ひ。せめて餘所母様は眩暈持もしもの事はあるまいか。衛門。マひどい呑人ぢやぞい。其次は荷ながらお顔なりとも拜まうと。遙々と

ますわい。わしも年たけた悴めを。様

子あつて久離切り。大阪へ養子にやつ

たが。傾城といふ魔がさして。人の金

を盗んだとやら。揚句に所を走つた噂。

此大和は生國なれば。十七軒の飛脚屋

仲間。お上からも隠し目附。或は順禮

古手買ひ。節季候にまで身をやつし。

この在所はモウくく論議最中。そ

れも誰故なれば。ソ、其傾城の嫁御

故。モ近頃愚痴な事なれど。世の譬

にもいふ通り。盗みする子は憎うなう

て。繩かける人が恨めしいとはサこの

事。久離切つた親子なれば。よからう

が悪からうが。構はぬ事とは思へども。

大阪へ養子に往て。利發で器用で身を

もつて。身代もよう仕上げた。あ

様な子を勘當した。親は大きな白痴者

と。指差しられ笑はれたら。エ、マ、

マ、其嬉しさはどうあらう。調今にも

つい探し出され。繩かゝつて引かるゝ

時。ア、孫右衛門は目水品よう勘當し

た。出かしたと。譽められるのがおり

や悲しい。譽められるのが俺や。悲し

うござるわいの。ア、それを思へば一

日も。早う往生お救ひと。拜み願ふ

は今參る如來様御開山コレ。マ佛に噓

がつかれうかと。どうと平伏し悶え泣

き。梅川も聲を上げ。忠兵衛は障子よ

り手先を出し伏拜み。スエテ身を揉み敷

くぞ。道理なる。猶も涙を押拭ひ。

様子聞いたか聞かぬか知らぬが。子

を釣出さうとお上の計ひ。養ひ親の妙

閑殿。一昨日半へ入れられたげなわい。

エ、サ、サ、それでつくく思ふに

は。實の親を便りにして。若しも忍ん

で來はせまいか。來たらは何ぼう不便

でも。養子親への義理あれば。かくま

ふことは扱て置いて。親が繩かけ出さ

ねばならぬ。ア、どうぞ來てくれねば

よいが。爰ら邊りを舞ひくく。舞

ひ付きはせまいかと。四年この方逢ひ

もせず。懐かしい子の顔を。見ぬ様に

くく。難行ながら神たゝきもコレ。

不便さからでござるわいのくく。ア、

とは言ふもの。若死するも人の一生。

義理ある親を牢へ入れ。おめくくと逃

隠れは。末世末代不孝の惡名。所詮造

れぬ命なら。一日なりと妙閑殿を。早

う牢から出すのが孝行。ササ、サ、

覺悟極めて名乗つて出い。ア、今ぢや

ないく。今の事ではないわい。い。

シタガ。それも親の目にかゝらぬ所で。

繩かゝつてくれ。ヨエ、現在血を分け

た子に。早う死ねと教へるも。浮世の

義理か。是非もなや。なぞ前か

たに内證で。斯うくした傾城に斯う

便宜でも仕をつ

たら。久離切つても親子ぢやもの。隠

餘りに四十兩。遣ひ果して二歩残る。

にござつても構ひはあるまい。オ、。

居の田地を賣立てゝも首纏はかけまいに。皆あいつが心から。其身もせまい

金ゆゑ大事の忠兵衛様。科人にしたも

オ、忝うござる。〳〵。物言はずと。顔見

苦をしをつて。いとしばなげに嫁御に

私から嘸ぞ。憎からうお腹も立たう

ずと。手先へなと觸つたら。それが本

近。思ひも寄らぬ愛目を見せ。知晋近

が。因果づく」と諦めて。お赦しなされ

望逢うた心。親子一世の暇乞ひ。ガコ

附親にまで隠れる様に身を持ちなし。

此世の別れにたつた一目。逢うて進ぜ

て下さるなど。地悦ぶ中に忠兵衛は嬉

ろくな死もせぬ様に此親は産付けぬ。

て下さんと。奥の障子を明けるを引

しき餘り駈出でて。親子手に手を取交

エ、憎い奴ぢや〳〵と思へども可愛ゆ

止め。詞ア、コレやくだいもない〳〵

せど。互に親とも我が子とも言はずい

ござると。泣沈み、フシ分けたる。血筋

〳〵。たつた今も言ふ通り。たとへ詞

はれぬ世の義理は。涙湧出る。水上と

ぞ。哀れなる。地涙の際に巾着より。

はかはさいでも。顔見合はしたりや

フシ身も浮く。ばかり泣き叩つ。地折か

金一包み取出し。調是は京の御本寺様

繩かけるか。俺が口から訴人せにや。

ら聞ゆる多くの人音。二人を奥へと突

へ。上げうと思つた金なれど。嫁と思つ

養親への義理が立たぬ。何ぼ義理が立

きやり〳〵。詞コレ女中。アノ物音は

てやるではない。只今のお禮の爲。是

てたいとて。親の手づからどう繩が掛

確に捕手。この裏道の小川を渡り。藪

を路銀にちつとなと。遠い所へ往て下

けられうどう繩がかけれうぞいの。

を抜ければ御所街道。サ、サ、早う

されと。地渡せば梅川押戴き。調お心

オ、御尤もで御座ります〳〵。そんな

〳〵と地フシ氣を揉む所へ。地順禮姿の

附いた此お金。逆様ながら戴きます。

ら顔を見ぬやうにと。地傍に有合ふ手

打ち連れだち。調此内がきぶさいなと

地大阪を立退いても。私が妾目に立て

拭取り。泣く〳〵後に立廻り。慮外な

地どか〳〵と込入る所へ。組子一

ば。借鶴籠に目を送り。奈良の旅館や

がらと。フシめんない千鳥。調御不自

三人輪の茶屋。五日三日夜を明し。廿日

山にはあらうが。斯うさへすれば。傍

人かけ来り。調所は長谷の山つゞきに

梅川忠兵衛と名乗る者。休み居つたを 二人も共に ヲシ飛んで行く。地孫右衛門 切株で足つくな地と届かぬ聲も子を思
追取り巻き。搦め捕らんと致せども。門は飛立つ嬉しさ。天の助けか忝いと。ふ。平沙の善知鳥血の涙。長き親子の
中々手に合ひ申さずと。地聞くより小裏道見やつて伸上り。詞オ、さうぢや 別れには。カンやすかたならで安き氣
頭扱てこそ。來れ續けと引返せば。其道ぢや。ソレ。其藪を潜るなら。も涙。涙の 三更、浮世なり。